

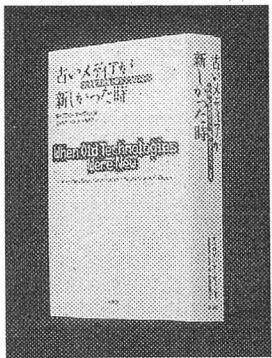
●評者・白石 隆(京都大学教授)

十九世紀末、「電気」は急速に世界のあり方を変えていった。たとえばロンドンにおいて、白熱電球は、一八九〇年の十八万個から一八九九年の六百八十七万個へと普及した。また電話は一八七六年、アメリカで三千台だったものが、一九〇〇年には百三十六万台に増加した。では電気テクノロジーは世界をどのように変えたのか。本書は、この時代、「電気」が、専門家と大衆の想像力、欲望、ファンタジーとどう結び付き、専門家と大衆、ジェンダー、人種、階級、公的な領域と私的な領域、支配と被支配などの関係をどう再編成していったのか、これを、膨大な資料にもとづき、豊富な事例をこれでもかこれでもかと積み重ねて論証した労作である。

ここにはさまざまの貴重な知見がある。なかでもおもしろかったのは、この時代、「電気」「エレクトリシヤン」「電光(エレクトリック・ライト)」「電話」などがいまとは違った意

「電気」による世界統治

古いメディアが新しかった時



新曜社
4500円

キャロリン・マーヴィン著

味の広がりをもち、いまよりはるかにさまざまのファンタジーを生み出していたことである。たとえば電光は、電気照明で飾り立てられた自由の女神の活人像のように、身体を飾る電氣的なスペクタクルに応用された。電気宝石というものもあった。また展覧会、見本市、行列、街路などでは、光の塔、光の噴水、光の山車、電飾旗など、電灯を使ったさまざまなスペクタクルが上演され、究極兵器として人工的稲妻というものも構想された。

しかし、そうした「新しい」テクノロジーの上に構想された世界は、一見、革命的に見えても、実は「アングロ・サクソンの技術によって効率的に世界が統治される」世界であり、海を越えた瞬時の通信コミュニケーションによって一異教は葬られ、全地球がキリスト教の輝かしい光明に照らされる「世界だった。おもしろい本である。しかし、決して読みやすくはない。

吉見俊哉、水越伸、伊藤昌亮訳。

◇キャロリン・マーヴィンペンシルベニア大学アンネンバーク校助教授。コミュニケーション論。